
官になるなら執金吾

恋姫好きに贈る中国英雄伝

家康像

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

富になるなら執金吾 恋姫好きに贈る中国英雄伝

【Zマーク】

Z7542T

【作者名】

家康像

【あらすじ】

三国志の物語が始まる一百年前。魏の曹操や、蜀の諸葛孔明も尊敬してやまない英雄の物語が始まろうとしていた……。

この物語は、恋姫ファンを中心に楽しんでもらおうと思つて書いた、ネタ物語です。史実の英雄たちに頭を深く下げたうえで、皆さんにこれをお送りいたします。

(前書き)

この物語は、恋姫ファンかつ中国史好きでないとわからないと思します。

ですから、興味のない方は、御覧にならない」とをお勧めします。また、史実をもとにしているとはいえ、作者自身による自己解釈やお話設定があるので、絶対に正史と混同しないよう、「注意願います。

見てくださる方に、幸あれ。

時は新の王莽の天下の頃。

時の都・常安（長安）の太学で、懸命に学ぶ者たちの姿がありました。

ある者は至聖・孔子の教えを一生懸命読みふけり、ある者は友との親睦を深め、またある者は、仕官のために、様々な著名人に取り入るなど、将来を見据えた若者たちでいっぱいでした。

「」のお話は、そんな若者たちの中の、とある乙女たちの物語。

*

「あーあ」

ある日、夕暮れの常安の街の中で、一人の少女が溜め息をついた。

「どうしたの、^{しあわせ}秀ちゃん」

溜め息をついたお団子髪の少女の友人らしき、栗色の髪の女の子が尋ねた。

「どうして僕は、お勉強が上手くいかないのかな……」

やう言つと、青みがかったお団子髪の少女は、歩きながらも力なく下を向いた。

「そんなことなによ?」

栗色の髪の少女が、うな垂れる親友を慰めよつと言つた。

「秀ちゃんは、昨日、憶えていなかつた」とはつやんと覚えていたよ。だから、大丈夫」

「でも、僕は茶柳や 露々のよひには……」

「なに言つてんのよー?」

不意に、明るい女の子の声がした。言つたのは、黒髪を頭の後ろで二つに分けた、チビでハ重歯の女の子だった。

「秀兒。どうしてアンタはいつもそひ、後ろ向きなの? いつまくよくよしてー。」

「露々……」

秀兒と呼ばれた、お団子髪の少女が呟いた。

「でも、僕は、茶柳や露々のように頭良くないし……」

「あのね、秀兒」

秀兒の態度ことつといひを切らしたらしく、露々が言ひ寄つてきた。

「あんたは自分で思つてゐるほど馬鹿じやないの！　だいたい、この露々は天才だし、茶柳の頭も特別なのよ！　それと比べる方が無理つてものでしょ？！」

まるで自分が天才と言わんばかりの言動である。もつとも、こう言われた秀児にとつてみれば、露々の言つたことは事実なのだから、言い返しようがないのだ。

「わうだよ」

今度は茶髪のおとなしそうな雰囲気の少女・茶柳が口を開いた。かや

「露々ちゃんの言つとおりだよ、秀ちゃん。馬鹿の一つ覚えでも、それが千回あれば千個の物事を覚えたことになるんだから、ゆっくり勉強しようよ」

慰めになつてゐるのかわからないが、彼女なりの慰め言葉のようだつた。

「茶柳……、露々……」

秀児は心強い友達一人からの励ましに、とても嬉しくなつた。そして、こつ言つた。

「ありがとう。なんだか、元気が出てきたよ。よーし、僕、明日も頑張るぞ！」

「わうわう、それでこそ秀ちゃんだよ」

「それで」秀児よ

「ううして、明日への決意を新たに、今日も無事に日が暮れる……、かと思われた。秀児の次の一言がなければ。

「と、いつ」とで、今日、先生から出された宿題、教えてくれないかな？ どうしてもわからない……」

「ダメだよ、秀ちゃん」

優しい雰囲気なのに、厳しさのある顔で、茶柳が言った。

「ちゃんと自分で考えないと」

「ええー！？ も、それじゃ、露々……」

「うなつたらもう一人からと思つた秀児だったが、現実は甘くない。

「ダメだよー」

露々も冷たく言ひ放つた。

「露々に聞いたところで、秀児に露々の言ひ方のことが、わかるわけないでしょ？」

「そ、そんなああああー！ー！」

「ううとうとう出しつづけ秀児。

世の中は非常なまでに非情であった。

*

それから数日後。

「うーん……」

とある露店の前で、秀児は困っていた。彼女の田の前には、甘そうな蜜（砂糖黍のしづく）が売られていた。都・常安で蜜が売られるのは、極めて珍しいことである。なにしろ、蜜の原料である砂糖黍は、彼女の故郷の荊州よりもさらに南の南の果ての土地でしか採れない、貴重な産物なのである。当然、蜜の値は張る。例え、杓子ですくつた一杯でさえも、相当な銭を持っていないと手に入れることはできないのだ。まして、実家の荊州から上京して、貧乏学生生活を送っている秀児が買えるような値段ではないのだ。

（わかつてんだよ。僕がお金ないことぐらい。でも、このおにしそうな、甘そうな蜜、絶対に逃したくないなあ……）

蜜欲しさのあまり、思わず右手の人差し指を口にくわえながら、ゴクリと喉を鳴らす秀児。彼女はとにかく、どうやつたら蜜が手に入るかしか考えていなかった。そのため、周りが目に入っていなかつたのである。

「て、うわわ！？」

次の瞬間、人とぶつかって転んでしまった。

「いてて、す、すみませ……」

立ち上がりつつ、相手に謝りつとしたとき、秀児の目に、相手の顔が入った。

「あれ、茶柳？」

それは、毎日出会う、幼馴染みの顔だった。

「秀ちゃん……？」

「茶柳。どうしてここに？」

「どうしてって、ここで蜜を売ってるでしょ？　だから、買えないか見に来たの。でも、高くて……」

「奇遇だね。僕もだ」

そう言つた時、一人の頭の中で、何かがはじけた。そして、閃いた。

『そりだ!!』

そして、二人で今の手持ちの錢を確認しあつたのである。数えてみると、一人の錢を合わせて、ようやく一杯の蜜を買えるだけの金額だった。

それがわかれれば、もうためらつ」とはない。

こうして、秀児と茶柳は、いわゆる「割り勘」で、一杯の蜜を手に入れたのであった。

「わあ、おーいしーー！」

「あ、こらー。秀ちゃんばかり舐めないのー。」

仲良く蜜を舐めあう二人。彼女たちが再び蜜を舐めあうのは、さらに後の事である。

*

またある日のこと

秀児と茶柳は、司隸校尉（都知事兼警察長官）（都知事兼警察長官）の陳崇のもとを訪れていた。

太学で至聖・孔子の学問、儒教を習っている学生の大半は、将来国の官僚となるため、都の有力者のもとで職探しをするのである。

荊州南陽の豪族出身である秀児と茶柳も例にもれず、なんとか手に職をえて、出世のための足がかりにしていこうと思つて行動をしていたのである。

司隸校尉の陳崇は、秀児たちと同郷の南陽の人である。特に、秀児の実家とは付き合いがあつたので、そのつてを頼ろうとしたのである。

しかし、陳崇のもとを訪問したまではよかつたのだが、ここで問題が起つたのである。

「「めんね、茶柳。すぐに戻つてくるから」

なんと、陳崇は秀児のみを招き入れ、茶柳は外で待たされる羽目になつたのである。

「「うん、気にしないで。秀ちゃんは頑張つてきてね」

屋敷の中に入つて行く親友を、茶柳は笑顔で見送つた。

（ああ。まさかここに来て、秀ちゃんに抜かれるとは思わなかつたなあ……）

笑顔で見送つたのはいいのだが、やはり切なさを感じるのである。なにしろ、一人で一緒に来たのに、一人だけおいてけぼりにされたのだ。

（やつぱり、私が秀ちゃんに宿題とか教えてあげなかつたからかな……）

なんとなく悲壮感を胸に漂わせながら、一人で思いふけつていた時だった。

「ただいま

なんと、そんなに時間が立つていないにもかかわらず、秀児が戻つてきてたのだ。

「え、しゅ、秀ちゃん！？」

茶柳は度肝を抜かれた。

「なんで、こんな卑く！」？

すると、秀児はなんてことないといつ表情で、いりの答えた。

「断わつて來た」

一瞬、秀児が何を言つたのかわからなかつた。

「え？」

「だから、僕、断わつて來たんだよ？」

「ええーーー？」

茶柳は思わず声をあげた。

「な、なんでー？」

「だつて、僕が一人だけで面接して、そして出世したら、茶柳とお別れになる。そんなのいやじゃないか。だから断わつて來たんだよ

秀児の口から、さう聞いた茶柳。思わず、目から涙がほとばしる。

「秀ちゃん……」

そう言つた次の瞬間には、茶柳にとつては大好きな親友の、自分

のそれと比べたら薄い胸の中に飛び込んでいた。

「秀ちゃんのバカー！ そんな、そんな理由で……」

そこから先は、言葉にならなかつた。

「泣くなよ、茶柳。僕が泣かしたみたいじゃないか」

秀児はそう言つて、親友の背中に手を回してあげるのだった。

*

それからさうに数日後

「それで、断つたつて。秀児、アンタは本当に大馬鹿ね！」

常安の街の中に、露々の声が響き渡る。もつとも、大勢の人々の喧騒にかき消されてしまつが。現在、秀児は年下の露々と一緒に街を歩いていた。

「ははは。でも、茶柳たちと別れるなんて、そんなのいやじゃないか」

苦笑しながら、秀児が言つた。

「まあ、確かに気持ちはわからないではないけど。でも、秀児。露々がアンタだつたら、すぐに仕官したよ！」

小さい背丈に反して大きな声で、露々は言い続けた。

「だつて、アンタの南陽の家、お金厳しいんでしょ？ 早く仕官して、働かないと……」

露々の言ひ方はきついのだが、なんだかんだで、友達想いなヤツなのである。彼女の言ひ方こと、一理あった。しかし、秀児は首を横に振った。

「たしかに、今すぐに仕官するのも悪くはないと思つよ。でもね……」

いい含めたあと、秀児は言葉をつなげた。

「なんとなくなんだけど、今は仕官しない方がいい気がするんだ」

「は？」

「いや、僕のカンだよ。自分でもわからないけど、今、仕官せずして、茶柳と一緒に南陽に帰れば、きっとおもしろいことが始まるんじやないかと、そう思つんだ」

「おもしろいこと？」

「それがなにかは、わからないけどね」

秀児がそう言つた時であった。

「路を空ける……」

突然、役人たちが街を行く人たちに命令し始めたのである。役人たちが通行を規制するのは、すなわち、朝廷のお偉いさんの行列が通ることにほかならないのだ。

「まつたく、こんなときに」

ブツブツと文句を言いながら、脇の方に避ける露々。

「お偉いさんの行列かな？ どんな人だらう」

露々に続いて、秀児も道の隅に移動した。

やがて、彼女たちが行こうとしていた、市内中央の方から、騎馬の行列がやつて來た。大勢の騎馬の近衛兵を引きつれていたのは、きらびやかな衣装に身を包んだ、眉目秀麗で、威厳のありそうな人物だった。それは、都の治安維持を担当する重職、執金吾（しつきんご 警視総監）の行列だった。

秀児はそれを、露々と一緒に眺めていたが、やがて、それに目が惹かれていたことに気付いた。

（ああ、なんてカッコいいんだろう。僕も、あんな風に皆の前で着飾つて、街の平和を護る仕事をしてみたいなあ）

その時、ふと故郷、南陽の風景が目に浮かんだ。

広大な盆地に広がる美しい畠。それを汗水流して耕す人々。牛の鳴き声。漢水の豊かな流れ。今頃は故郷にいるであろう、母親と人の兄と、二人の姉と、妹。そして、もう少し幼いころに遊んだ、

長い黒髪のきれいな、清楚な女の子。

それが思い浮かんだ時、秀児は突然、誰に言つてもなく、いつ言ったのである。

「決めたぞ！」

「な、なに！？」

いきなりの声にびっくりした露々が聞き返してきたが、もうお構いなしであった。

「僕の目標は決まった！」

そう言つて、一度間を開けた後、秀児はこゝへ言つたのである。

「富になるなら執金吾。妻を娶らば陰麗華」

「妻つて、アンタ、女でしょうー？」

露々のツッコミが入った。

「いや、そこは、その……。でも、もちろん、僕はちゃんと旦那さんはもうつよ。でもね……」

少し動搖しながらも、秀児は決意したことを、自分に言い聞かせるように繰り返し言つた。

「いいか、露々。僕は将来、必ず、執金吾になる！ そして、麗ちゃんを幸せにしてあげるんだ！ よし、そうと決まつたら……！」

「あーあ」

露々は盛大に溜め息をついた。

「露々はつき合ひきれないよ……」

そんな一人を余所に、きらびやかな行列は通り過ぎていくのであつた。

*

秀児、時に十六歳。彼女の姓は劉。名は秀。字は文叔。ぶんしゆく真名は秀児。前漢第五代・景帝が子、長沙定王劉發の血をひく末裔の一人である。

間もなく彼女は、親友の荼柳じゅりゅうこと朱しゆ?（字は仲先）、露々こと禹う（字は仲華）たちと共に、大きな激動の渦の中に巻き込まれいくことになる。

そして彼女たちの物語や功績は、一百年後の三国時代においても語り継がれ、魏の曹操、蜀の諸葛孔明にも尊敬されて止まなかつたのである。

貧ひん困くん学生で、執金吾になることを夢見る少女・秀児が、漢王朝再興の大英雄、世祖・光武帝として名を残すのは、まだまだ後のお話である……。

(後書き)

登場人物

・劉秀

字は文叔。真名は秀児。しゅうじ 荆州南陽郡蔡陽県の人。一人称は僕。景帝の子、長沙定王・劉發の末裔。作中、16歳。青みがかつたセミロングの髪を、ツインでお団子にしてる（アホ毛有り）。貧乳。この短編では、長安（常安）の太学で学んでいた頃のお話。言つまでもなく、後の世祖・光武帝。将来の夢は、「官になるなら執金吾。妻を娶らば陰麗華」（でも、きちんと旦那さんも貰うよ）

・朱？（朱祐とも）

字は仲先。真名は茶柳。ぢやる 荆州南陽郡宛県の人。一人称は私。秀児の親友。作中、16歳。栗色の髪を肩口で切りそろえている。童顔だが、胸は秀児よりはある。後の光武帝の功臣の一人。

・？禹

字は仲華。真名は露々。ろろ 荆州南陽郡新野県の人。一人称は露々。作中、13歳。黒髪ツインテールで八重歯で碧眼。言つまでもなく、お子様体型。性格的には子供らしくわがままな所があるが、詩経を誦し、勉強も得意な天才児。自称「張良」。秀児の親友。後の光武帝の功臣の一人。三国志の終盤に登場する、？芝の先祖。

・陰麗華

真名は麗々。れいれい 南陽豪族、陰氏の娘。劉秀より年下の清楚な美少女。長くて美しい黒髪の持ち主。妹バ力なお兄さんがいる。後の陰皇后。

いかかでしたでしょうか？

ちなみにこの三人の服装は、当時は太学の学生ということでありとした、白黒の服と、帽子（冠？）を着用しているイメージです。（なんとなく、恋姫の朱里や離里の服装みたいな感じ）

ちなみに、実際の儒者はゆつたりとした服を着て、頭には冠をつけていました。

書いた後に言うのもなんですが、光武帝・劉秀さま、それから朱さんと？ 騷さん。本当に申し訳ございませんでした。

ただ願わくば、この話を読んでいただいた方が、少しでも光武帝・劉秀に興味を持つていただくことのみです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7542t/>

官になるなら執金吾

恋姫好きに贈る中国英雄伝

2011年6月12日14時06分発行